

10年前の4月20日、宮崎県で家畜伝染病「口蹄疫」が発生しました。法に則りワクチン接種の後、殺処分を命じる国と、わが子のように牛を育ててきた畜産農家との狭間に立たされた橋田・西都市長(当時)の葛藤が始まりました。

西都市独自の 共同殺処分埋却方式

私は国に対して、「殺処分した後保障をちゃんとしてください」と訴えました。

そしてもう一つ、「西都市は牛舎では殺処分しません。一か所に集めて殺処分し、そこに埋めます。それを承諾してください。そうでないと



ワクチンを打たせません」と訴えました。そしてらOKしていただきました。

実は、他のところでは農家さんの牛舎に行つて、そこで殺処分し、そこに埋めます。これが農家さんにはつらいし、一軒一軒するので大変な手間暇がかかるんです。

西都市では、処分場として1畝ほ

牛や豚をどこに

どうやって埋めるかに苦闘

どの土地を1か所探し、買い上げることになりました。この土地を探すのも大変でした。平地だと水田が近くにありません。梅雨の時期でしたから

1畝くらい掘ると水が湧いてくるんですね。山は水源管理区域です。水源ですから絶対だめ。

もう台地しかありません。台地はほとんど畑です。交渉しに行くと、持ち主が「先祖代々の土地に牛を埋めるのは絶対許さん」と言うんです。その方々を説得するのも大変でした。

やつと説得して溝を掘っていたら、隣の土地の持ち主が「おれの土

地の隣には埋めさせん」とか言うんです。「そんなことを言つてたら西都市は潰れますよ。どうかお願ひします」と何度も頭を下げて一人ひとり承諾してもらいました。



橋田 和実
Hashida Kazumi

家畜の命に花束を
～あの日から10年



元西都市長 (宮崎県)

殺処分した牛や豚はクレーンで一頭一頭吊り上げて、深く掘った長い溝に埋めていきました。皆さん、テレビや新聞で、その溝に青いビニールシートが敷かれてあつたのを記憶かと思えます。あれは私に言わせると、何の意味もありません。

溝は幅が5畝、深さが4畝です。

そんな広いシートはありませんから何枚もシートを継ぎはぎします。当然シートとシートの間が空いてしまいます。

それにビニールシートを敷くと死んだ家畜が腐らないんです。昔は人間も土葬でした。それを微生物が分解して土に戻してくれていました。ところが、ビニールシートを敷いて、そのうえ消毒のために消石灰を撒くから微生物は死んでしまいます。だから家畜の死骸はそのまま残つてしまい、地下水の状態まで悪くなります。

夜行つてみると、埋めたところの上から青白い不気味なガスが出ていました。

私は県に直訴しました。「ビニールシートは敷く必要はないんじゃないか」と。殺処分する前にワクチンを打つていますし、感染してない牛もかなりいたわけですからね。県はこう言いました。「周りの地域住民がいいと言えばいいですよ」と。

それで途中から私の判断でビニールシートを敷きませんでした。地域住民に言うつと「ビニールシートを敷け」と言うのは分かつていましたから、私は黙つてやりました。

(宮崎市倫理法人会のモーニングセミナーにて)取材、編集・水谷謹人
前号1面の続編です